

# アトリエ 琉游舎 だより 115号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2021年10月6日発行

## 大いなるものが過ぎゆく 野分かな

高浜虚子

- 野分は秋に吹く大風のことです。現代で言う台風のことですが天気図も衛星も無かった昔は前兆はあったにしても何日も前から野分が吹く日を予想することは難しかったことでしょう。
- 地球温暖化のせいか最近台風の進路も時期も定番と言うものがなくなってしまったようです。今年も進路が定まらない迷走台風がありました。迷走する国に合わせなくてもよいのですが。
- 興味深い俳句を見つけました。高浜虚子の“大いなるものが過ぎゆく 野分かな”です。彼が見た“大いなるもの”とは何だったのでしょうか。例えば写實的に解すれば大風や大雨に象徴される大いなる自然と言うことでしょうか。台風そのものの光景を写実した客観写生俳句です。
- もし写生俳句として読むとしたら、私は余りこの句に興味を持つことはないでしょう。“大いなるもの”が単なる自然現象に還元されてしまうのであれば、野分がもたらす自然の驚異を眺めているだけで、そこに魂の揺さぶりや人と大いなるものとの魂の感応は感じられません。
- 私はこの句を読んだときに相米慎二監督の映画「台風クラブ」を思い出しました。私の中では日本映画ベスト10に入る映画です。台風の襲来をきっかけとして、思春期の鬱屈した感情を爆発させる少年少女の危うさ・脆さを表現している映画といわれていますが、この解説では上掲の句の解釈と同じ視点になり、私はこの映画を評価することはできないでしょう。
- “大いなるもの”は自然の中にも私たちの中にもあるものです。理性や科学では語ることでできない魂・神・宇宙・永遠のいのち・仏などに言語化されているものです。野分と私たちの中の“大いなるもの”とが感応道交して、私たちが法律や道德などの人為的規定から解放され原初に戻る瞬間の表現です。この極私的解釈が作者の意図したものかどうかは知りませんが。

### 10・11月スケジュール

			木	金	土	日
			7 映画会 13時半	8	9	10
11	12	13	14 映画会 お休み	15	16	17
18	19 読書会 13時半	20	21 映画会 13時半	22	23	24
25	26 読書会 13時半	27	28 映画会 13時半	29	30	31
11月1日	2	3	4 映画会 13時半	5	6	7 写経会 13時半
8	9 読書会 13時半	10	11 映画会 13時半	12	13	14

**読書会**  
 10月19・26日(火)  
 13時半  
**10月は第3・第4火曜日**  
 日蓮の「立正安国論」と消息文を読みます。テキストもすべてご用意。お気軽にどうぞ。

**写経会**  
 11月7日(日)13時半  
 般若心経・自我偈・観音偈の手本を用意しています。

**10月14日(木)映画会  
 お休みします**

秋分の日の翌日にまた桜枝岐村に行ってきました。前回から二週間経っただけですが、景色は大きく変化していました。道中一面に白い花が咲いていたそば畑は茶色く枯れて実を付け始めているようです。地上が白から茶色に変わったことと対照的に、上を見上げると緑が茶や赤や黄の色に変わり始めています。桜枝岐村の高い場所では少しずつ葉っぱの色が変化し始めているのです。今回の桜枝岐行きの目的は言うまでも無く前回雨のため6合目で登頂を断念した燧ヶ岳への再チャレンジです。天気予報は晴れ、今日こそは頂上から尾瀬の絶景、東北関東の山々の雄姿が見られるはずと早朝4時半の出発、2時間以上のドライブも苦にならず勇躍して到着した御池登山口の駐車場は白い雲が垂れ込めていたのです。朝方の靄だろうと楽観的に考えて登り始めては見たものの、8時になっても9時になってもその白い靄は晴れず、これはぶ厚い雲だと断定せざるを得なくなりました。雨に降られることはなくても見上げる景色は前回と全く同じ真っ白。途中の湿原は赤茶色に紅葉した草紅葉のカラフルな世界に変わっていましたが、燧ヶ岳があるはずの目線の先は無色の世界です。

白い雲を掻き分けるように黙々と登り続けたおかげで、予定より早く最初の頂上俎峯に到着。そこから最頂部の柴安峯まで20分ほど。柴安峯の頂きは広々として見晴らしが良く、お昼を食べたり写真を撮る登山客で賑わっているはずですが、間近に見えるはずの頂きは全く見えません。案内板はなくても間違いのない道だろうと登山者のあとをついて行ったら、実はそれは下山道の一つだったようで、下るばかりでいつまでも登りが始まらないことに気づいたときは後の祭りでも大幅ロスでした。気を取り直した柴安峯を目指し、ついに何も見えない頂上に立ったときはもうこれで燧ヶ岳は満足したことにするか、もう一度晴天の日を狙って再々チャレンジするか、でも天気予報が当たる保証はないしと、達成感に浸るはずの頂上であれこれと迷っている始末です。身の丈に合った決して無理をしない私の山登りの最大の効用は、頭の中を空っぽにできることです。登る途中の、疲れた休みたい喉が渴いた、あの森林の切れ目がひょっとしたら頂上かなどの雑念が頭の中で渦巻いていたものがあるとき急に空っぽになる瞬間があります。念がなくなること、つまり「無念」になる瞬間です。無念は仏教用語で“妄念のないこと。迷いの心を離れて無我の境地に入り、何事も思わないこと。”<sup>注1</sup>と言う意味です。悟りの境地、やすらぎの処です。無念であれば迷いが起きるはずがありません。私の数少ない無念のときは、山登りと経を読んでいるときに突然頭われ、一瞬にして去っていきます。その貴重な瞬間をムダにするかのように、東北以北では一番標高の高い山の頂上であれこれと迷っているようでは信仰者の登山姿ではありません。真っ白な頂上から観る真っ白な景色もまたありのままの景色なのです。

風がサーッと吹き抜けていった瞬間に人が崖の方へと動いていきました。雲が風に流されて尾瀬沼の風景が現れたのです。青い水面と湿原の草紅葉が鮮やかなコントラストを見せ、遠くの山々も見えるかと思った瞬間、また白い雲がやって来て絶景の幕を閉じていきます。幕開きの時間は十秒くらいでしょうか。一瞬の絶景に上がった人びとの歓声が落胆の声に変わった瞬間です。しかしまた次の機会がやって来ます。その間5分くらいでしょうか、また風が雲を飛ばし一瞬の青空、そして尾瀬沼の湖面に映し出される空の青。しかし雲の合間に垣間見えたその景色もまた瞬く間に閉じられていきます。その光景の繰り返しに、もっと絶景を堪能したかったという念を残しながら下山を始めました。無念と残念の間を行き来する燧ヶ岳登山行でした。

私は残念と無念の間を行き来し、それをありのままのものと受け入れることがやすらぎの処への歩む行ないと考えます。頂上からの一瞬の絶景に全ての念を忘れて無念になること、しかしそれが瞬く間に遮られて残念の思いに襲われること、頂上での短い時間と狭い場所の繰り返しの経験は、私たちの日常生活の残念と無念の繰り返しの象徴であることに私は気づきました。私たちの日常は悟りと迷い、執着と諦観、無我と我との間を行ったり来たり繰り返すのです。無念と残念の間を生きているのです。悟りや無念は厳しい修行をした僧侶や長い年月を寺で経を読み法話を語ってきた高僧たちの特権ではありません。ランニングをしているとある瞬間を過ぎて頭が空っぽになり重かった足が急に軽くなることがあります。私が走るのではなく体が勝手に走ってくれているのです。ランニングハイというのでしょうか。仕事や趣味や勉強に集中していると、時も忘れ寝食も忘れることがあるでしょう。私が山登りで無念になる瞬間は足の存在を忘れる時です。この重い足を一步一步前に進めれば頂上へたどり着けるはずだという念がなくなるときです。私が読経で無念になる瞬間は読経を忘れる時です。字と意味を読まなくなったとき声だけが私の体の中から発せられます。

あることに自分の心と体を向けて行うとき、私たちはそこに心と体を集中させます。集中すればそれ以外のことへの意識（雑念）が無くなっていきます。そして意識を集中しようという意識も無くなったときが無念のときです。無我、悟り、諦観です。ただ私たちはこれを無念と残念のときと二つに分けて生活をしているわけではありません。この二つの念を無意識の間に行ったり来たりしていることが私たちの日常です。無念と残念は不二であり一如です。背中合わせの表裏一体、一心同体です。残念があるから無念があるのです。仏教の原則である因縁縁起の考え方からすると悟ったという固定的な状態はあり得ません。だから無念の境地を得たという高僧がいたとしたらそれはまがい物の仏教者です。もし悟るといふ言葉を使うとしたら「私たちはどうやっても無念の境地に居続けることはできないといことを悟った」ということが「悟る」です。あたり前の生活の中で残念を残念がり無念の瞬間を喜ぶ。その日常そのものがやすらぎの処であり私たちの悟りなのです。